

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



御通里五編下

~13
3012
154



3012
15
種

昭和九年
七月九日
購求

遊仙奇遇錦の里卷之十五

江戸 為永春水著



第七九回

當下清雅の梅が谷と言ふは梅がうりまうと聞より愛媛
見し如く悦びのさうりも多し 清三左衛門であるさう之け方ハ又
目まであの腰が姿を隠してさう何野ふどうと居るまらんや
さう一初もあまのいふにびて来自由をして居るさうらと聞つて
咽暮のいどと居るさういふさうをして居ると聞つて實に
あけられ

赤松平

二

あごぶくと結通傳と申すお茶をへわづらうらふやふら
結様も結様茶の更う思ふとよもみの出世の仕ようお中
老あごの顔うてもよみの顔うらうらトヤも原お梅さんのお
里をあらねまると矢張おの心金をお由緒とくおあの方の
お娘おさうまもとサキ山縁でお茶をへおよんを成ての
まもが伊豆のおまを成ようおあさん成てうら親也の
おまも勿体おひとお思ひので今まらう許由も断らるおま
おまらうらうら申す 借入るむごおの腰のひでら左振りの

三十五

ろよ 寛おおの山縁とらふおのふお思ふおまらうらうら
深く感おのらうらうら梅さんのお娘お梅さんと私のお
災難を助らうらうらおあさんおまらうらお寛おは合甘を
らうらうらうらお梅さん 文おそれおまらうらお梅さんがはてお異
のらうらお寛さんお梅さんおあさん私とおあさんが海の日お合
更をお梅さんとあうらうらおの更おあさんおあげら 清
言おあげら 徳おあうらうらおの思おあうらおあうらおあ
うらうらおあうらうら紙へ書らうらと猶書おらうらおあうら



初くお主の思いでありまはるる世の女の文女お如形に
いひまけの者おぼゆる思を世に極むるの
宿評でもごうお清をすてよまは極むるの
愛をさすらふとお思の成まうごまは極むるの
お姫様へお願おまはるる宿元へまかりしを
中よませし中よとおまはるるお茶を
家々もよふお役人さんをお返しのせらるるお
お

お主の思いでありまはるる世の女の文女お如形に
いひまけの者おぼゆる思を世に極むるの
宿評でもごうお清をすてよまは極むるの
愛をさすらふとお思の成まうごまは極むるの
お姫様へお願おまはるる宿元へまかりしを
中よませし中よとおまはるるお茶を
家々もよふお役人さんをお返しのせらるるお
お

徳を傳へて身持をせりりれされつされび血家名ゆ傳へ
悪のまけれははりて捨去る親類中へ寄合つけ
誓居を存せし相談ひはまもまをたらしめ改め助くる實家
ハ本家ことど改め申を養ふみゆつて徳を傳へて合身する
遠慮もあれは丸くあつて申存めて傳へてまゐる
親たちも諸方の親類方も不氣なれば枝多し
たれば終ふ徳あるハ十里ほど隔る田舎の一家へ頼みし
ち

居の身もせられまをば徳を傳へて流傳へる
は家の跡目不定なる者なりは別な店を建てる
お文と改め申す境へんとせしむるは
法用とありは且つ實家ゆも改め助ぐ別な店を建てる
相談ひは方ゆも申すせんと思て分るる金よを清経が
あふまると本宅の奥庭に清経が親に居る所の
地面も廣ければ新に家を建てて清経を住ませる

堂より 娘をへる海 文を 出さし けしむの 小る 雲か 雲
 を成す 思ふの 糸 委細の 涙を 中上 出ぬを 中上 けられぬを
 おく 長く 目見を する ようふと 出ぬの 出さし 中上 終る
 改し ぬを 出さし ぬを 入ぬ 仕付 されぬ 終る 一家 終る 終る 終る
 樂へける とも 小龜

赤 祐 平

遊仙 奇 遇 錦 の 里 卷 之 十五 大 尾

トアノ

五ノ

